

張九齡の「鏡に照らして白髪を見る」

報告：花岡風子

今回のお題は張九齡（673?～740）の「鏡に照らして白髪を見る」という絶句でした。張九齡は、盛唐期の官僚政治家として有名ですが、詩人としても名を残しています。673年に今の広東省曲江県の貧しい家に生まれました。非常に優秀な人で、702年科挙に合格し、712年に即位した玄宗皇帝の宰相を勤めたこともあります。優秀であるだけでなく、非常に清廉潔白な人でもあったようで、善政を敷いた若き玄宗皇帝率いる盛唐の時代を支えた人物の一人です。

世はそれまでの門閥貴族の時代からエリート官僚の時代へ、つまり出身は問わず科挙に合格し、能力があれば政治の中核で活躍できるという時代への過渡期にありました。

貧しい地方出身者が一国の宰相にまでなったわけですから、当然のごとく、張九齡を応援してくれる人もいれば、足を引っ張る人物もいたようです。

張九齡は時の宰相張説ちやうえつという人物に引き立ててもらいますが、貴族の親玉であった李林甫に疎まれます。そして張説ちやうえつの死後、李林甫の讒言により荊州（湖北省）に左遷されてしまうのです。

忠実かつ清廉潔白な張九齡を欠いた後、玄宗皇帝の時代は下り坂にさしかかります。玄宗は専ら楊貴妃を寵愛したため、その楊貴妃一族の兄貴分に当たる楊国忠が台頭してきます。李林甫と楊国忠との間に権力闘争が始まりました。李林甫の死後は、これも楊貴妃お気に入りの安禄山がのし上がって来て、楊国忠討伐に名を借りて兵を挙げ、かくして唐王朝は破滅の道へと突き進んでいきま

した。世にいう「安史の乱」です。

張九齡は、安禄山という人物の野心を早くから見抜き、玄宗皇帝に気をつけるようにと何度も進言していましたが、聞き入れられませんでした。後に、官を辞して故郷に帰る途中、この詩を詠んだ、とされています。その時の張九齡の無念の思いがこの詩にも滲みでています。

zhào jìng jiàn bái fà
照鏡見白发
zhāng jiǔ líng
張九齡

sù xī qīng yún zhì
宿昔青雲志
cuō tuō bái fà nián
蹉跎白发年
shuí zhī míng jìng lǐ
誰知明鏡里
xíng yǐng zì xiāng lián
形影自相怜

shù kù sè qīng yún zhì kō rō gō shì
宿昔青雲の志
sà tā hāi hāi nēn
蹉跎たり白髪の年
tāi shì rān mēi qī yāng ōu chī
誰か知らん明鏡の裏
kēi ēi ēi
形影自ら相憐れむを

一句目、「青雲の志」という言葉が目飛び込めます。良い政治を行いたい、その為に努力して出世しよう、という男らしい心意気が伝わってきます。

二句目、一転して挫折に心痛める白髪の老人像が浮かび上がります。

三句目、四句目で鏡に映る老いさらばえた自分とそれを見つめる自分が互いに慚愧の思いで憐れみ合っていることを誰も知らない、と自分の密や

かな感慨を吐露しています。

さて、三句目の「誰か知らん明鏡の裏」という一句は、李白の『秋浦の歌』の三、四句目の「不知明鏡里，何处得秋霜」（知らず明鏡の裏、何れの処にか秋霜を得たる）を連想させます。「この一句は李白の詩で有名なんですけどね、実は張九齡の方が先なんですよ。李白は張九齡が長安を去った後に上京していますし、『秋浦の歌』自体が、もっと後に書かれたものですからね。そうするとコレ、李白がパクったんじゃないか、と思えるわけですよ。李白はね、これだけではなくて、パクリの名人ですからね。しかし、これがまたパクられた相手より良い作品なんですよね」。植田先生の解説に一同大笑いしました。パクるかパクられるか、それは問題ではない。後世の人がどう評価するか、古典の世界ではそれが問題だ、ということでしょうか。

さて、話をもとに戻しましょう。四句目は鏡の中の自分と鏡の外の自分がお互いに老いて失意の中にある様子を憐れみあっている、と切ない場面で終わります。たった四行、二十文字でありながら意気揚揚とした輝ける青年期から、失意のどん底の老年期が、さながら映像のように生き生きと描かれています。

今回も植田先生から、作品の時代背景、作者の人生遍歴をたっぷり伺ってから詩の朗読練習に入りました。「張九齡の経歴を知ってからこの詩を読むとより深く理解ができると思いますね。中国の詩は時代を映す鏡でもありますね。逆に時代背景が分からないと半分も理解出来ない、というのが特徴ですね」と植田先生。

「漢詩は時代を映す鏡」とは、なんとサラリと名言が飛び出すことでしょうか。正に言い得て妙なり、としきりに頷いていたら、続けて植田先生が

「ところが李白の詩は時代もクソもないですね。読んだだけで、ガシッと人の心を掴む、そんな特徴がありますね。でも、李白は現実の政治には何の役にも立っていないんですがね」と言われたものだから、一同また笑い出しました。

確かに李白の詩には時空を飛び越えて人の心をわし掴みにするようなワイルドな魅力がありますね。とはいえ、李白には張九齡のように国を背負い立つ政治家としての気概はなく、ひたすら天地を呑み込むような、気宇壮大な詩を作り続けました。また、杜甫のように詩を通して政治をよくしよう、なんて考えはサラサラなかったようです。但しこう決めつけてしまうことには異論もあるようですが……。

さて、この五言絶句は、起承転結がわかりやすく、詩を作る人のお手本になるようなキチンとした構成にもなっています。在職中、孟浩然の就職の世話もしたことがあったことは、前回孟浩然の詩の解説時にご紹介しましたが、作風からもどことなく優しさが感じられます。李白のような天才詩人ではないけれども、素晴らしい人物であり、その人間性が滲みでているような味わい深い作品でした。

さて、二首目は、中唐の詩人張籍です。中唐の詩人と言えば、韓愈、白居易、張継、賈島の名が挙がりますが、韓愈は生涯の師匠、白居易は詩友であり、同じく韓愈を師匠とした賈島とも交流があったようです。剛直で頑なな反面、誠実で心優しく、面倒見の良い人物だったようです。日常のちょっとした想いを何の飾り気もなく、サラッと表現するのが得意だったようです。

この詩は遙か昔の手紙にまつわる内容です。当時はまだ郵便制度も確立していなかったので、手

紙を出すには人に託すしかなく、大変なことでもありました。

qiū sī
秋 思
zhāng jí
张籍

luò yáng chéng lǐ jiàn qiū fēng
洛陽城里見秋風，
yù zuò jiā shū yì wàn chóng
欲作家書意萬重。
fù kǒng cōng cōng shuō bù jìn
復恐匆匆說不盡，
xíng rén lín fā yòu kāi fēng
行人臨發又開封。

らくようじょうり しゅうふう
洛陽城裏秋風を見る

かしょ ばんちょう
家書を作らんと欲して意萬重。

ま そうそう と つ
復た匆匆として説き尽くさざるを恐れ

こうじん た のぞ ま
行人の発つに臨んで又た封を開く。

一句目、洛陽城内で初めて秋風というのを意識した、ということでしょう。「見」は目で視覚的に捉えるというより、「会う」「出くわす」という意味です。「秋風が吹く」というと万人共通に寂しさをイメージしますが、ここではそれに望郷の念が重なります。ふと、故郷の家族に手紙を書きたいという思いが湧いてきて、その思いが益々募る様が「万重」という言葉から伝わりますね。

二句目、その後作者は手紙を書いて、封をします。ところが、三句目になって、急いで書いたため書き足りなかったような気がしてきます。そこで、四句目に、行人（手紙を運んでくれる人）が旅立つ前にまた封を開くのです。

「最近ではメールを使うようになって便利になりましたけど、私なんか昔、書き終わった手紙をポストに入れる段階になって、字を間違っていたかな？と心配になって封を開け直したこと

が有ったような無かったような……。そんな気がします。皆さんもこういう事って、あったかもしれませんね」と植田先生。そういえば私も何度かそんなことがあったな、と思い出しました。私の若い頃はまだ文通はさかんにやっていたから、手紙を書いて封をする時の気持ちや家族や友人、時に恋人から来た手紙の封を切る時の気分なんかも……。この詩を鑑賞しながら、新鮮な気持ちで思い出すことができました。

今は、私も両親や息子とラインでやり取りする時代になりました。30年くらい前までは想像も出来なかったことですね。

この詩の作者は、長い旅先にあった、とのことで、最後の一句の「又封を開く」という表現から、いかに望郷の念が強かったかが伝わってきますね。

「ちょっと俳句に似たような、一見易しそうで、こういう詩が書けたらなあ、羨ましくなるような、実に見事な詩です」と植田先生。

なるほど平易な詩語で真情を伝えるのを得意とした人の作品だけあるな、と思いました。ありふれた日常の一コマでありながら、心がホッコリとして、それでいてなぜか記憶に残る印象的な場面。じっくり心に効いてくるのを感じます。

この作品は中唐という時代背景もあってか、ピッタリと規則に則ったキチンとした構成になっています。盛唐の頃はまだ型破りな作品もみられましたが、中唐の時代は科挙に漢詩が出題されたため、型通りの詩が多いのが特徴なのだそうです。しかし、型通りの作品であっても、作者の人となりというものは、こうして作品に滲みでるものだなあ、とつくづく思った次第です。